

地球というフィールドで、全ての人の健康、安全を守るため、
世界に通用する感染症科医としての道を極めたい医師

のりづき まさたろう
法月 正太郎

国際医療協力局
運営企画部 保健医療開発課
医師



★略 歴

- 2005 和歌山県立医科大学 医学部卒業
(スキー国体競技5年連続出場)
- 2005 自治医科大学附属病院 ジュニアレジデント
- 2007 自治医科大学附属病院 内科シニアレジデント
- 2008 亀田総合病院 総合診療感染症科 シニアレジデント
- 2011 自治医科大学附属病院 感染症科 フェロー
- 2016 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 運営企画部 保健医療開発課 医師
- 2018 厚生労働省 大臣官房国際課 課長補佐、内閣府 野口英世アフリカ賞担当室 室長補佐
(出向)
- 2019 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 運営企画部 保健医療開発課 医師

★現在の主な担当業務

(主な国内業務)

疾病対策チーム

JICA課題別研修 医療関連感染管理指導者養成研修

WHO関連 グローバルファンド関連政策支援

国際医療開発研究費 主任研究

「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた、

グローバル化に伴う感染症リスクへの対応に関する研究」

(主な国外業務)

2016年7月 ブラジル ジカアウトブレイク 感染症専門家

2016年8月 コンゴ民主共和国 黄熱病アウトブレイク JICA短期専門家

2016年12月 ラオス 血清疫学研究

2017年1・5・12月

パキスタン 定期予防接種強化プロジェクト JICA短期専門家

2017年2月・4月 ラオス 血清疫学研究

2017年6月 リベリア・シエラレオネ JICA課題別研修フォローアップ

2018年5月 スイス 世界保健総会

2018年6月 コンゴ民主共和国

エボラアウトブレイク(赤道州) 国際緊急援助隊感染症対策チーム

2018年10月 WHO西太平洋地域委員会

2018年10月 カザフスタン プライマリー・ヘルスケア国際会議

2019年1月 スイス WHO執行理事会
2019年5月 スイス 世界保健総会
2019年6月 大阪 G20財務大臣・保健大臣合同セッション
2019年8月 東京 第3回 野口英世アフリカ賞 授賞式
2019年9月 米国 国連総会 UHCハイレベル会合
2019年10月 フィリピン WHO西太平洋地域委員会
2020年2~4月 フィリピン WHO/GOARN COVID-19アウトブレイク感染管理専門家

法月さんが、医師を目指したきっかけを教えてください。

両親が医療従事者、という環境ではなかったのですが、中学生の時、友人のお父さんが病理の技師をされていて、職場の見学をさせてもらったり、看護体験実習などに参加させてもらったりしました。その頃から、漠然と医師になりたいと強く思うようになりました。

また、当時は手塚治虫のブラックジャックを愛読しており、憧れていました。

どうして感染症科医をめざしたのですか？

もともとは外科系が好きで、研修医の時には、消化器外科、循環器内科、感染症科の三つで迷いました。一般に病気は、自分の中から発生しますが、感染症は敵が見える。外敵をやっつけるというところが面白いと思ったのが、感染症科を選んだ理由の一つです。また感染症科は、患者さんの話を聞くことで診断していきます。食べたもの、行った国、出ている症状などを聞いて、想定される病気を考えた上で、適切な検査をし、最終的に診断します。症状は患者さんの免疫力などによってさまざまですし、発熱していても感染症でないこともあるので、幅広い症例を知っておかなければなりません。そのため研修ではまず総合診療のトレーニングを3年間受けました。一つ一つ手掛かりを集めたり検証したりしながら原因を突き止めていく手法は、ローテクであり、シーロック・ホームズのように、

感染症の面白さでもあります。しかも感染症は早い判断、早い行動が重要で、何か起きた時には緊急対処をしなければいけない。臨戦態勢の中で感染拡大を抑えていくこともやりがいがあります。



パキスタンカイバル・パクトゥンクワ州のノマドに対するワクチン種活動。BCGの跡を確認中

協力局に入職しようと思ったのはなぜですか？

感染症科医は、他の診療科医と異なり、目の前の患者を治すのみならず、抗菌薬の適正使用や感染対策などにより病院あるいは地域全体の患者を治すという重要な使命があります。また集団の利益を優先させ、個人の人權を制限する法律にも関与します。協力局に入る前の10年間、ただひたすらミクロの視点で目の前の患者の治療を行ってきました。

2014年のエボラ出血熱のアウトブレイクをきっかけに、日本或いは世界を見渡すマクロの視点で感染症を見つめ直す事が、世界に通用する感染症科医を目指す私にとって必要だと考えました。交通手段が発展するとともに、多くの疾患も日本に輸入されています。SARSやエボラウイルス、新型インフルエンザなど国民の生命・安全に直結する事例は今後も必ず発生することから、行政知識や診療の背景にある制度を理解した上で、国際的視点での判断能力やコミュニケーション能力、経験を積みたいと考え協力局に入りました。



コンゴ民主共和国で立ち上げた臨時検疫所における患者発生のシミュレーション



コンゴ民主共和国におけるエボラアウトブレイクにおける活動

今後、国際医療協力局でどのような仕事をしていきたいですか？

協力局は、医療の最前線であるフィールドも、WHOや保健省といった中央における意思決定の双方を経験できる日本でもオンリーワンの貴重な環境だと感じています。感染症科医という自分のキャリアを生かしつつ、さらに世界に通用する感染症科医になりたいと考えています。

私は、特に感染症危機管理や感染対策に興味を持っています。普段から感染症に対する備えがなければ、感染拡大を防ぐことができません。これは、強靱な保健システム、UHC（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）※につながる概念です。過去の海外のアウトブレイク事例を見ると、患者さんが著しく増加するのは医療機関です。患者さんと医療従事者の間で感染が広がるためです。ですから、病院内での感染拡大を防ぐ対策や、最もリスクにさらされている医療従事者を守ることなど、危機管理能力を強化するような仕事をしたいと考えています。

※すべての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態（世界保健機関）

最後にこれから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

海外も含めた医療の仕事はとてもやりがいがありますし、視野も広がりますが、それはゴールではありません。医療従事者として海外で仕事をするためには、きちんとトレーニングを受けて、ベースを作っておくことがとても大事だと思います。また海外の仕事は「支援」というより、「一緒にやっていく」というスタンスの方がとても大事であると協力局に来て強く感じました。私も低中所得国を含む派遣先では、感染症について非常に多くのことを学ばせてもらっています。現地のスタッフを尊重し、問題を一緒に解決することで、もし日本に入ってきた時にどう対処すべきかをトレーニングをさせてもらっているという認識で仕事をしています。支援することがゴールではなく、お互いWin-Winの関係で、一緒に安全な世の中を作っていくことが大事だと思います。



フィリピンの新型コロナウイルス病棟におけるアドバイス



ジュネーブにおける世界保健総会において、
厚労省WHO班のメンバーと共に



WHO短期専門家として訪問した病院のスタッフと



ありがとうございました。